# 4 つながりを、より強く、より身近に

群馬県◎片品村社会福祉協議会

片品村は、尾瀬や武尊山など豊かな自然に恵まれた村だ。住民同士のつながりと助け合いが今もそこにある。しかし人口4784人の村は支援の担い手が限られる。そこで、住民組織の役員が中心となり、片品村社会福祉協議会（以下、村社協）がそれをサポートしている。村の日々を伝えるきめ細かな情報発信も村社協の大きな特長。村内外の人々をつなぐ実践を取材した。

村内32地区でふれあいミニサロンが開かれている

## 今日のサロンは、こんな様子です

7月のある日の午後2時。地域の人々が村内の上而集会場に歩いてやって来た。

村内32地区（小字単位）では、月1回ふれあいミニサロン（冬季を除く）を開催する。この日は、上而地区と中里地区合同の開催日。会場で準備していた上而地区福祉委員の笠原邦枝さん（66）と中里地区福祉委員の新井清江さん（59）が、人々を迎え入れる。

同じ頃、中央公民館内にある村社協では、職員（ホームヘルパー）の戸丸恵子さん（52）と星野直子さん（44）が上而集会場に向かおうとしていた。社協に7人いるホームヘルパーはふれあいミニサロンをサポートしており、2人1組で担当地区をもっている。歩いて会場に行けない住民を迎えに行き、2人は集会場に向かう。

参加者が集まり、おしゃべりが一段落すると、主担当の戸丸さんがレクリエーションを提案していく。この日は、歌、手遊び、後出しジャンケン、玉送りなど。「参加している方の身体状況を考え、皆さんが楽しんでいるか様子を見ながら内容を決めています」。介護予防の要素も重視していると戸丸さんは話す。

今回で4回めという参加者の男性は笑う。「ふだん会わねえ人と会えるしさ、会話できるしさ、頭の運動にもなるし、生きがいがあるね。気持ちが大きくなるね」

## 気後れなく集える場が必要だ

ふれあいミニサロンは、福祉委員とホームヘルパーが協力して開催している

ことが特徴だ。外出機会が減っていた人々の社会参加の機会を重視して、80歳以上の高齢者と、65歳以上のひとり暮らし高齢者を対象とした。

２００３（平成15）年度に取り組み始め、当初は村の中間圏域８区（大字（おおあざ）単位）で年２回開いてきた。この時は民生・児童委員と、32地区の福祉委員が活動を担っていた。

すると「もっと参加したい」という声があがった。実現策を考え、福祉委員とホームヘルパーが開催を支援する体制に移行したのが２０１１（平成23）年度。この時から32地区でふれあいミニサロンが始まり、８地区単位のふれあいサロンも、年１回継続している。

## 会える　話せる　楽しめる　安心できる

福祉委員とホームヘルパーは地域の人々をつなげ続けようと動いている。

サロンの開催前には、福祉委員が案内状をもって対象者一人ひとりを訪ねて回る。笠原さんは高齢者から「寄れやい」と声をかけられ、いろいろな話をするそうだ。

村社協係長の星野（ほしの）ふき子さん（55）は、「福祉委員が誘いに来る。当日も会場に一緒にいる。安心できるから参加する人が増えているのです」と言う。

会場ではホームヘルパーが、誰もが楽しめ、集まった人同士の距離がより近づくことができるよう気を配っている。

「ご近所さんとお茶を飲んだり、グランドゴルフをしたり、地域のつながりはあります。しかし、80～90歳代になると、なかなか出かけて行かない。ふれあいサロンに来ればみんなに会え、話ができる楽しみもあると思います。サロンが終わった後、『うちにお茶飲みに来いやい』と声をかけ合って集まっていることもありますよ」。星野直子さんはこう話す。

ホームヘルパーならではの気配りで、集まった参加者の体調変化も見逃さない。

「皆さんが楽しむ様子をみて、こういう場が必要なのだと感じました」。やってみて初めてわかったと新井さん。委員全員がふれあいサロンの大切さを実感し、より熱心に各地区で参加を呼びかけるようになったという。

## 地域の「今」を伝える日々の情報発信

32地区で開かれているふれあいミニサロンの様子は、村社協ホームページの「できごと」コーナーに「今日のふれあ

**片品村社会福祉協議会**

| | |
|---|---|
| 所在地 | 群馬県利根郡片品村鎌田3946 中央公民館内 |
| 電話 | 0278-58-4812 |
| ホームページ | http://katashina.jp/ |
| 職員体制 | 事務局長、係長、福祉活動専門員、介護支援専門員、ホームヘルパー7人<br>※ホームヘルパーは、ふれあいミニサロン、福祉有償運送、給食サービス等も担当 |

取材当日の上而地区・中里地区ふれあいミニサロン。福祉委員の笠原さん（写真奥左）と新井さん（写真奥右）も輪の中に入る。ホームヘルパーの戸丸さん（手前）と星野直子さん（左）は、みんなが楽しめるよう気を配る

そして、地域福祉を伝える手段としても、職員が少ない村社協の周知手段としても、インターネットを使った情報発信が有効だと考え、ウェブサイトとSNS（フェイスブック、ツイッター）で村の「今」を発信し始めた。

伝える情報は幅広い。①老人クラブやシルバー人材センターや地域の福祉関係団体の活動、②毎年春に中間圏域8区単位で地域のリーダーが呼びかけて行っている「地区別福祉関係者会議」の報告、③福祉委員や民生・児童委員の動き（委嘱や研修の様子）、④地域行事、⑤福祉関連トピックス、など盛りだくさんだ。村社協は〝オール社協体制〟で全役職員がさまざまな場に出向く。実際の様子を見て感じているからこそ伝えられる、生の情報なのだ。

「いつも情報が早えな」と住民から感想が寄せられる。民生・児童委員からは「周知につなげたい」と声があがる。「今いサロン」と題して掲載される。情報はほぼ毎日更新されるまめまめしさだ。

紹介ページは写真中心で見やすく、参加者の表情や活動の様子がわかりやすい。写真を撮り、参加者にインタビューをして、報告を書いているのは担当のホームヘルパーの皆さん。その報告をホームページに掲載しているのが、村社協の福祉活動専門員の千明長三（ちぎらおさみ）さん（45）だ。日々発信する意図を千明さんはこう話す。

「地域で何が起きているのか、社協は何をしているのか、そんなことを知ってもらいたいという思いで、情報を載せています。多くの人に見てもらえるよう、『今日はこんなことがありましたよ！』と親しみやすい語りかけを心がけて発信し続けています」。

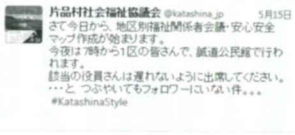
千明さんは中央共同募金会が設置する「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議」のメンバーであり、被災地支援で情報発信の重要性を強く感じたという。

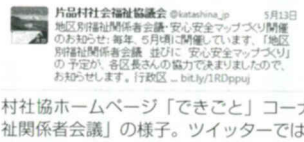
**4区　福祉関係者会議・安心安全マップづくり（編集部抜粋）**
**2015年5月20日 9：44 pm**

今夜は4区（東小川地区）の地区別福祉関係者会議・安心安全マップづくりが、老人憩いの家で行われました。ふれあいサロン、ふれあいネットワーク（災害時要援護者支援）安心カード設置、スノーバスターズ登録の説明を行いました。

役場総務課から、指定避難所や自主防災などの説明がありその後、安心安全マップの作成を行いました。

対象者が増えた地区は、見守る側の人が不足し高齢化の影響がかなり感じられました。参加された役員の皆さん、お疲れ様でした。




村社協ホームページ「できごと」コーナーに紹介された「地区別福祉関係者会議」の様子。ツイッターではさらにこまめに情報発信

日のふれあいサロン」では、毎回1人に焦点を当てて紹介するので、自分が主役になると誰もがうれしそうに見える。

発信は、村外で暮らす家族・親戚・知人をつなぐものでもある。ホームページに掲載された祖父母を見つけて孫が電話をかけてきた、プリントアウトした写真を渡して話が弾んだ、ということもあった。「元気な様子に安堵した」と、海外で暮らす家族からのメッセージも届く。

「家族や故郷を思う人をつなげたい」と千明さんたち社協職員は思っている。片品村や地域福祉に興味をもつ人からの反響もあり、ウェブサイトやSNSは、情報交換の場にもなっている。

## 個別課題・地域課題に気づける関わりを築く

**片品村社会福祉協議会**
**係長　星野 ふき子さん**
**福祉活動専門員　千明 長三さん**

片品村社協の特徴のひとつは、オール社協体制で動いていること。「担当の割り振りはありますが、事務分掌にかかわらず役職員みんなで動きます。情報の共有は早いですね」。小規模の社協だからこその近さがあると千明さんは話す。

冬季に豪雪があると、村社協と行政職員は、共助では追いつかない要援護者の支援に入る。東日本大震災・原子力発電所事故後、片品村は福島の人たちの避難先となった。千明さんは被災地に支援に入り、星野さんたち役職員は片品村に避難して来た人たちの支援に奔走した。

「ふれあいミニサロンや地区別福祉関係者会議には、多様な立場の人たちが参加します。集った人が情報交換・共有できるようにしたい」。本人が気づいていない課題に周囲の人や社協職員が気づくためには、一人ひとりとの関わりを太くしていくことが重要であり、より身近な社協になりたいと星野さんは考えている。

左から星野さん、千明さん

## 担い手が限られている共助が難しくなった地域の課題解決へ

現在、村内8地区では「地区別福祉関係者会議」で災害時要援護者の見守り・緊急時の避難体制づくりに取り組んでいる。区長が呼びかけ、区内の地区（小字単位）の班長、住民組織や各種団体のリーダー、有志住民、福祉委員、民生・児童委員などが集まり、話し合う場だ。

この会議は、地域福祉活動計画を策定するプロセスで立ち上げた福祉座談会を基盤につくられた。福祉座談会で住民が地域課題を話し合うなかで、災害時要援護者の把握、災害時の避難体制づくりを開始した。各地区の様子が共有される場なので、過疎が進む地域で共助が難しくなっていると課題が明らかになれば、除雪ボランティア「スノーバスターズ」を組織化し、助け合う取り組みを展開してきた実行力がある。もちろん村社協はここにも関わる。

自分たちの地域で起こっていることを発信し共有し、つながり合う片品の人々の取り組みは続く。